



~ 13
4055
1



門 へ 13
號 4055
卷 1

三十

仇討天負東洋繪實記 惣目録



才吉

夏別阿古屋の松由来之事

兼 石居忠房居士舎光氏の事

才二

修養者大竹院舎光小次郎が人相

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

とらんら事

才三

一
懐胎民於倉光思書問答の事
并民於思書一見の事

才四

一
倉光小次郎象浮見扱の事

并小次郎一見の事

才五

一
倉光小次郎山歎入内路の事

并小次郎楮と殺す事

才六

一
倉光小次郎山歎入内路の事

并動字と法多事

廿七

一 倉光小次郎江戸へおもむく幸くらひらこ

并常例に百あそびに海州指あふるぜいじょうれい

幸しあせ

廿八

一 蓮花院日侍貞次まんなげいんひさぢの幸しあせ

赤田村小次郎忠の横死あかぢむらの幸しあせ

廿九

一 田村小次郎忠の横死くらむらの幸しあせ

并坂上小次郎忠の横死さかのうえの幸しあせ

三十

一 倉光小次郎忠の横死くらひらこの幸しあせ

兼江戸へおる事一

分十一

一 倉光少次郎くらひかり龍舟りゆうしゅうの事一

兼椎いの木き系けいめてめてて望城ぼうじやうと教しやうは事一

分十二

一 倉光少次郎くらひかり関宿せきしゆく旅たびの事一

兼福屋ふくや纏まと手てもてもてて金きん子すとと金きん子す

事一

分十三

一 坂上さかのうえ江え前まへをを史し山やま破やぶのの事一

兼古こ右みぎ四よ方かたへへ通とほ道みちははららたた事一

一 坂上さかのうえ江え前まへをを史し山やま破やぶのの事一
兼兼対たい面めんのの事一

并常列口より返書の事

才十七

常列水戸領之沼城山谷氏の事

并江万那印土村の福ある事

常列口より沼御ある事

并江帝を丈江戸にお用事

事

才十八

坂上江帝を丈江戸へ返く事

江帝を丈浅草田村屋敷ある事

返る事

并町山車に在訴の事

才十六

一 会光少政帝江戶急報於八右衛門

ふ然りんの事

無事坂に移る事

月十七

一 会光少政帝改名海洲坊苗の事

兼雷治を少政帝が宅へ移る

事

月十八

一 坂上四郎を史改名の事

兼松女の聖徳の事

一 田村金四郎を法田本場より聖徳

の事

月十九

一 放^{とま}約^れ四^ど帝^ろを^ら御^やに^ら浦^らを^ら小^ら持^らふ事

兼^あ泊^ら陸^ら海^らに^ら出^らて^ら針^らめ^らん^らの^ら支^ら

一 放^{とま}約^れ四^ど帝^ろを^ら信^ら花^ら川^らに^ら四^ら帝^らを^ら

閑^い淡^だの^ら事^ら

兼^あ泊^ら陸^ら海^らに^ら出^らて^ら八^ら龍^らと^ら相^ら争^ら

事

才^た二^に指^さ

一 天^{てん}滿^{まん}文^{ぶん}御^ご傳^{でん}記^きの^ら事^ら

兼^ああ^ら人^らの^ら四^ら帝^らを^ら信^ら花^ら川^らに^ら出^らて^ら

牙^がと^ら成^らる^ら事^ら

一 雷^{らい}治^ぢを^ら信^ら花^ら川^らに^ら出^らて^ら四^ら帝^らを^ら

兼^あ治^ぢを^ら信^ら花^ら川^らに^ら出^らて^ら入^ら魂^らを^ら成^らる^ら事^ら

才^た亦^{また}才^た

一 服^{ふく}於^お平^{へい}を^ら治^ぢを^ら信^ら花^ら川^らに^ら出^らて^ら古^ら来^ら小^ら持^らふ^ら事^ら

一 英情變の事

平る逐電の事

英中危前して江戸を治ふ事

才亦二

一 雷治赤田村を江戸を治ふ事

の事

一 八尾江戸を治ふ事

英八尾危難ふ事

才亦三

一 放駒江戸を治ふ事

花川戸へ来る事

英徳を治ふ事

一 服部平右衛門の事

英大和を治ふ事

とらるるはら事

才亦也

服於平馬雷治とらまへいまを治くまひりと教事とらす
平馬長九郎へいまま入才との上うへの治とらの事

才亦又

服於平馬とらまへいまお才と改名かへいの事

英長てい九郎く幼童うんき先許うんきよの事

江戸えど男伊達おとこ今合いまの事

并放釣とら四郎し平馬へいままが住居すまひを

才亦とはら事

才亦六

服於震とらと林はやし仕立しだて管くだを治とらる事

はら事

一 豆蔵奇書百捕り事

倉光小次郎生の浄玄狼丸を捕

りて書き傳へし事

一 兼小次郎常列よあはせて山田代

の事

牙之指

一 常列は右那布士村よあはせて徳村

の事

一 大和を長久寺倉光小次郎が

善提と申ふ事

惣目録大尾

仇討天貞東端繪實記卷之三

目録

- 一 ありしりこや 奥州阿古谷の松由來の事 まろやうい
- 二 そりけ 吾吾居家 そん 居士 そらう 念光氏 の事

仇討天貞東錦繕實記卷之七

奥州阿古谷の松由來の事

兼右の居家居士念光氏の事

昔實方の中將つづまのかこ奇松もと
りんとて降りりひらるふけ陰もあがり
あり名よあよ阿古谷の松をもと
りんんとて垣電松流の河にそ

よきしとせよこゝろく尋ねり
のひららに古くも変りぬればよ
のゆのさくそ名とちりぬるもの
るくつらぬれがあふよらん
しひららよ案料を翁よつらひぬ
翁ハ実言とらんて問てゆららハ君よ
ハ何変しと尋ねりや実言のさ
く我らるぐ物よりは陸奥入り

名よりぞ一何古かぬ松とんぞや
何ののく尋ねりらぬばよ
よののめらぬばとぬぐはら
ぬひぬれが翁とていさく

その
そよよ

陸奥のつらぬの松よ本陸て

つらぬ月のおそくは
けよよとて尋ねよらんあり

それハ往古日本に信之ヲ國として
一時的の事ありその後信之ヲ
今日お相のあま入
たりとありしは信之ヲ中將大よ
とびぬかおしははらばらんが
うしこぐひをとるしはるる
うちよるとびて別きりふらん
されば陸奥ハ日本第一の國
しと信之と事遠くやもされば
國民かこくるぬくよや王化は
せびしと夷賊蜂起はるる
の変わるり帝是と幕のひそ人の
上將軍よめいしは入て陸奥よ
法事府をおしそは東夷と信之
ありしゆきよ元龜天正のあひごた
天啓者とりしはありし海太

しつらあらしえ忠信えよゆりて
ら成か余堂成信子の多塔と法
僕千騎よたらざる少塔とゆつて
数日城と持かく大祖の内家族武
信余人あましく城中とあしり
その身ハ松平と反松平又は
内反海次とあつと死と回トあして
名と百天よとふれか關が系

御勝利ゆ後天下一統き
は熱功の賞よよらそ羽州山取
あいて信八石と信忠改より
ゆよゆらあ家申の士よ倉光
書と云りの有りる居家の始祖
伊賀守之別は佐一信より信成
よしつて今の書ハ伊代目とあ氏
と信より文武よ秀一のあれば

家中是とる弘法師の御書は
人の子有り惣以ハ内記として御書
あり次男ハ少次郎十八才ニ書目
ハ女子あり惣以ハ内記ハ澄和
して文道と好む常ニ書巻の家
ニ暇とよむ一々文と書詩と作儒と
ありむらさし一々書一々次男
少次郎ハ兄よのり力量も落く

弘法師の御書は
一々唯公流とる
歳不相應の上達一々内記
藉ハ公家あるをいふゆ一々家
中ハ是と書目一々御書は是と
山吹の城下まで大行院として御書
寺の修後者成りして是と書目
の来り加持祈禱はるる夏神の如
一々法師のいへる書目

て遠ちかひ—夏こハナ—これ是ゆも又ざう減う下うハ
勿め論ろん近きん今ぎん近きん今ぎんの老ろう若じやく男なん女にょそんの伝でん
也やんんとといいつつ事じ—あ—去こよよううつつて
山やま原はらの家うち中ちゆう—りりここまま—一いつ統とう佐さ作さく
—けけららゆゆけけ念ねん光かう島しま書しょがが家か内ないをを
ももれれ守まもるるももののららいい武ぶ運うん長ちやう久きうをを
祈いのせせよよるるそそんんのの形かたちおお品しんをを秋あきひひをを
—これ是こととををそそのの教きやう—これ是こととををり

佛討天貞東海經實記卷之三終

仇討天貞東條繪實記卷之貳

目録

一
もげん^もやだ^{げん}き^んん^{さう}ら^らこ^らら^ら
修験者大行院舎光少次^か
人相^{あひま}を^を見^みる^事一



佩討天貞東洋繪實記卷之貳

修滄者大杉院舎老少次節
人相を忍らる事

去福よ大杉院舎老少次節
城申をそと先さし順切ら
ろんまじん星遠境作さくのさる
をあく日く心さむきらば山舞か

かこりまきこりまき大徳院小次郎か
相成法くんととんとて中なるハこの
山ありそくゆつをれのウウ毎まて
あり諸君よあひてハこれぞと
あまのそく相あれは法ひまに海
小英名をわけた白りんのまじま
あしひる子海あんの相あつと
小首かさげててやまぞ母ハこれと

ていしてあまよれどろまかまか
の相実よのがれがくくくが我未
事いんままはまきまきなり
ままの人の子まきまきまき
甲乙なりくくまきまき
あまじんし入まきまき
まゆまきまきまき
て海龍そのまきまき

まじやとそごろろあまていんていぶ
ぬりらまぢけいんい何より拵あり
—てあぢぢぢくかんぐ—よま
よま—ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢ—ぢぢぢ—ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
あらとそそのまて人壽福祿が害
—ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

て人カのおよぶぬいん—ぢぢぢぢぢ
か—ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
渾沌よよつてハ自然とゆぬらま
ことあぢぢ—ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
よら又年のあぢぢぢよららららら
あんあぢぢ—ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢの相あり—ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

あーてのぞれ、事かゝるべし人の
生死せいじは定さだりしることありてはさし
し〜しりやをりるべし人の生死せいじは天よ
りしりて王おう公大人こうだいにんとてしりるものぞこの
道みちを〜と流ながりしりるふはぬいあ
まよわどろきしり〜しりるさしと
とろけしりるものぞまじが承うの
う〜し知し〜しりるそのまじはしりる

山やま傍わらの山やまうんぐよよろてかゝる山やま事ことと
うけ多おほむらら事ことのかゝり〜しりる
まし山やま傍わらの山やま行ぎやう力りきとてしりる人ひと教きやう
のぞろまの山やま修しゆ法ぽうりしりるまじ
まじり〜しりる大だい意い大だい悲ひよひはむ〜しりる
よ山やま行ぎやう上じやうとてしりる〜しりる
しりる大だい行ぎやう流りゆうしりるはあひしりる
その法ほふとまじり〜しりるまじりる

も子のゆい、格別のこのよに、
きりも中々もせ、佐公、
ゆま、
ゆと、このころ、
切るる、
とぬき、
な、
沙摩、
明王の法、

家所、
七りの、
の家、
るよ、
よ、
書、
名、
一、

よがてんゆうざれども何げなく
うてるまへて休まへ
あど休まん安座してやり
は妻はあつとの例は座してを
おのりのこととよざけ小ざる
るうてやたらハこれハ事
あしやん福がひのゆめ
まよはゆめはまわされぬ
まよはゆめはまわされぬ

のよらとびりてしとあり
りや眼申はるまじ
はてはるまじは書か
そのあつハ何ごの
まよはゆめはまわされぬ
やこまそのあつを
二十餘年いあよ
のやましあよ

の祿が久しはるひにどしどしはるむらさ
てまきうらとどしどしとて妻の顔色
しつらむらさるてぬしつらむらさ
卯の幸もしてはるしつらむらさ
夏あんな家へ来りてふらりし
ゆきざんともきざんしつらむらさ
ゆきとてはるしつらむらさ
しつらむらさしつらむらさ



ぬぢんハあなうしつらむらさ
こけて次男に小次郎が才のうらむら
もろろび今日山城下の修験者大行院
事家内安全のますのりしつらむら
頼しつらむらしつらむら
せしつらむら小次郎が才のうらむら
ふてかれハ法蓮よしつらむら
兼徳とありしつらむらしつらむら

りんが(あ)い(い)う(ま)か(れ)る(は)ぬ(せん)
の(相)り(と)し(ぬ)ぐ(と)か(し)て(ま)の(せ)
中(ち)の(が)れ(が)し(と)の(が)ら
い(ぬ)し(ぬ)ら(き)ぬ(れ)車(その)の(は)
を(う)け(ぬ)ら(り)ゆ(づ)あ(り)と
や(ら)せ(ぬ)く(い)う(ん)と(も)は(づ)き(を)し
る(く)れ(か)大(だ)の(が)ら(は)法(は)
ゆ(と)る(づ)と(同)ま(る)ぬ(せ)し(づ)あ(る)づ(づ)

か(ら)の(法)を(し)ぬ(い)ん(千)羽(の)
放(は)生(を)ぬ(る)し(ぬ)ら(り)ぬ(せん)の
か(ら)車(ゆ)ら(ん)と(か)し(り)き(ら)せ(し)づ
大(だ)の(が)ら(は)い(ぬ)ら(と)も(い)し
中(ち)の(ま)し(ぬ)ら(り)ぬ(の)の(ま)入(り)と
や(く)し(ぬ)い(ぬ)し(ぬ)ら(り)ぬ(も)
法(は)の(ま)し(ぬ)ら(り)ぬ(は)ら(づ)ま(い)
る(ぬ)ら(り)ぬ(は)ら(づ)ま(い)ぬ(は)

何そぞろと千羽の放し舎と然ひ
とてまろつらとるもさびとこのよはかへり
つらよ馬書これとめて大まやげて
うちこころひあよごとりとてやま
いころよ例の書居は狂ふとれは
かへあそこのことこのはまよのうそ
持て福金山がのこころひはまよ
るるこころのありのまよらと

今りとあくらよ人の残室とやてか
て妻に死やとまよのあれはつと
よとやうとるまよとてまよと
愚まをとるぶらうとまよとむ
さうりともりのとりあつて
あつたよけとるまよとまよと
かまよと相の相のあつたまよと
の又傷はあつたまよとまよと

どよよとて後がよとと海のたふは
とつらなうしーまじい人の一生いさぶ
多り何りて天子お軍のいらん
さああはいとせしー^{さいあん}若^{あん}経^{あん}海^{あん}経
さしおあそそるさ車ハ女子のるる
ひ町人百姓のよまーて武士さ
ゆのちのちまはさいしんはま車よ
何んぞその方^ちも武士の娘^{あやう}ありあん

ぞんやま^{ちん}町人^{えん}風情^{ふせい}のさ海^{あう}お望^{あう}よ
いとつれとさつてもほくごまゆん
さつるさぬぞさーさつしきて辰
さるぞうさよてあま^{ちん}と^{ちん}車^{ちん}の志
よよもあくとほよよくましるるを
うさるる^{あま}男^{あま}さるるの^{あま}く^{あま}る^{あま}ハ
ま^{ちん}権^{ちん}別^{ちん}さり^{ちん}と^{ちん}ハ^{ちん}あ^{ちん}の^{ちん}人^{ちん}ども
かくらうるさ^{ちん}事^{ちん}を^{ちん}笑^{ちん}う^{ちん}ハ^{ちん}折^{ちん}え^{ちん}折^{ちん}

とまのりかたはもと古民の
とちをゆつちとあつれとあ
りまのりおのちのちのち
とああーやああああありと
かこりたるよあつとあ書もた
ほびりりも民のののあ
れ通り侍の家よあまてあ
ううてせ北ハそくまぬのあ

ハ中次第が海流の相とよ
ハあつて功名を後代よの
知まびあ地るらあもあ
れをゆつちとあつれとあ
あまがきだんのあつとあ
こび何さるも又民のあ
まうせ仕續しつとあ
ちうよあつとあ

る



つんちん
くろくろを
たか
心
くろくろに
はるのえや
か

仇討天貞東

仇討天貞東 綿実礼卷之貳

金三也

